

世代を超えてつながる

受動を能動に変える共通項 多世代と地域をつなぐ「娯楽」の力



地域包括支援センターさらの杜は、制度だけではカバーできない地域に住む高齢者の暮らしに即した多様なニーズに対応するため、地域住民との協働で「小さな受け皿」をたくさん作ることを目指している。住民の地域活動参加へのきっかけとなったのが、大学生が落語を披露するイベントや、子どもと高齢者の交流イベントだ。それまで関わりのなかった多世代が交流することで地域が変わる。その関わりの交差点となっているのは、世代を問わず楽しめる共通の娯楽だった。

筑波大学落語研究会が運んだ「参加」の種

茨城県取手市にある地域包括支援センターさらの杜（以下、さらの杜）。担当地区は新取手、戸頭、永山など、東京のベッドタウンや精密機器の工場となっている地域を有し、高齢者や子育て世帯、外国人など、多様な人が住んでいる。さらの杜では、みんなで高齢者を支える地域の実現に向けて、地域の祭りへの参加や小学校でのイベント実施など、地域住民との接点づくりを積極的に行っている。中でも、住民の地域活動への参加を強力に後押ししたのが、2025年8月に筑波大学落語研究会を招いて行ったイベント「今日は落語で笑おうか」（取手市高齢福祉課地域包括ケア推進係主催）。取手市の認知症総合支援事業の一環として企画した。

「イベント開催の目的は、地域の高齢者の外出の機会づくり

です。認知症予防も期待できる『笑い』をテーマにしようと思いました」（さらの杜 長岡葉月さん）。長岡さん達は兼ねてから付き合いのあった福祉用具の事業所から、高齢者施設等で落語を披露している筑波大学落語研究会の存在を教えてもらい、地域の住民に落語イベントへの興味をヒアリング。好感触だったため、落語研究会に興行を依頼した。ヒアリングをした地域住民の1人、栗山郁夫さんはスマイルカフェ（オレンジカフェ）の事務局長や民生委員をしている、いわば地域住民の代表。「私たちの世代は、日常の楽しみとしてラジオやテレビで落語に親しんできた世代。生の落語を見る機会は多くないですから、楽しい企画だと思いました。笑うと幸せホルモンが出るともいいますからね」とイベントに賛成した。

筑波大学落語研究会は筑波大学の学生が活動する大学公認団体。コロナ禍前から大学のあるつくば市周辺の市町村の介護・障害福祉施設や図書館等から依頼を受けて落語を披露してきたが、現在は依頼が増え、年間10～20件程度、出張での興行をしている。

イベント当日は120名もの人が会場に詰め掛け、「王子の狐」など15～20分程度の演目が複数演じられた（画像①）。開催後は「また聞きたい」との声が多数。そこで同月、さらの杜で開催した認知症サポーター養成講座にも同研究会を招いた（画像②③）。

この反響の背景には、落語を生で見られることと同時に、演者と参加者のコミュニケーションがもたらす落語特有の会場の一体感があるのではと、筑波大学落語研究会の河本樹彦さん、佐伯健太さん（3年生、1年生。2人とも、上記イベントに参加）は指摘する。

「落語って、演者1人ではできないんです。お客さんの反応を見ながら演者は動きや話し方を変えます。演者とお客さんとのコミュニケーションがあって、笑いやストーリーが膨らんでいきます」という河本さんは、障害福祉施設では、聴覚が敏感な人への対応や言葉に配慮する必要を感じ、なるべく大



取材協力 ▶

（後列左から）

佐伯健太さん 筑波大学落語研究会

長岡葉月さん 地域包括支援センターさらの杜 社会福祉士

坂元洋一郎さん 同 生活支援コーディネーター

栗山郁夫さん 取手市西部地区民生委員、新取手スマイル応援隊事務局長

（前列左から）

神原よしみさん 地域包括支援センターさらの杜 主任介護支援専門員

小林璃空斗くん 子どもカフェ 開催スタッフ、小学5年生

長岡蒼士くん 同

山口大耀くん 同

河本樹彦さん 筑波大学落語研究会